OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	結束関係と統語現象
Author(s)	岡田, 禎之
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2007, 47, p. 87-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11078
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

結束関係と統語現象

岡　田　禎　之

0．はじめに

Kehler（1996, 2000, 2002）は，文同士の結束関係というテキストレベルの概念が，VP削除や空所化などの統語現象の説明に有効であることを論じている。本論の目的は，彼のVP削除などに対する分析を紹介し，修正案を提示して，それによって説明できる事項が増えることを論じることにある。以下，1節ではKehlerの分析方法の紹介とその問題点の提示を行い，2節で代案を提示し，3節ではその代案の検証を行い，4節で全体のまとめをする。

1．Kehlerの分析方法とその問題

1．1 Kehlerの結束関係の分類

Kehlerは文同士の結束関係を3つのタイプに分類した。それは，類似関係（Resemblance relations），因果関係（Cause-effect relations），近接関係（Contiguity relations）の3つである。(1) それらの結束関係のうち，ここでは特に以下の議論にかかわる類似関係と因果関係を取り上げて紹介する。

1．1．1 Resemblance relations

類似関係にある2つの文は，共通要件として先行文と後続文に共通する関係（p）および，その関係に関わっている対応する参与者同士（aiとbi）が共通特性を持っていること，が必要とされる。つまり，2つの文が「類似している」と認定するためには意味特性の類似だけでなく，形式配列上の類似がないといけない，ということである。

（1）For each [Resemblance] relation, the hearer identifies a relation *p1* that applies over a set of entities *a1*, ..., *an* from the first sentence *S1*, and a corresponding relation *p2* that applies over a corresponding set of entities *b1*, ..., *bn* from the second sentence *S2*. Coherence results from inferring a common (or contrasting) relation *p* that subsumes *p1* and *p2*, along with a suitable set of common (or contrasting) properties *qi* of the arguments *ai* and *bi*. (Kehler 2002：15)

このタイプの関係は少なくとも6つのサブタイプに分かれているが，代表的なものがParallelであり，等位接続詞andによって表示されるのが典型事例である。

（2）Parallel—p(p1) and p(p2), qi(ai) and qi(bi)　　（代表的な接続詞は and）

ここで，両方の文に現れる関係 p 1 と p 2 に共通する関係 p が認定でき，かつ対応する参与者 ai と bi がもつ特性が等しい（qi）場合に並行的であると認定できるとされている。Kehler が挙げた例は以下のようなものであった。

e.g. Dick Gephardt organized rallies for Gore, and Tom Daschle distributed pamphlets for him.　　（Kehler 2002：16）

両文に共通する関係としては「選挙協力する」という関係が想定でき，対応する主語要素はどちらも民主党の議員であり，選挙協力者である。他方で，対応する斜格目的語は，同一人物であり，選挙立候補者であるという共通特性を持っている。もっと単純な場合でいえば，

（3）John admires Mary, and Bill admires Jane.

共通する関係として同じ述語 admire があり，主語はどちらも admire する者，目的語はどちらも admire される者という共通特性を持っていることになる。

そのほかの5つのサブタイプに関しては，その制約内容と例を提示するだけにとどめておく。

（4）Contrast—(i)　p(p1) and ~p(p2), qi(ai) and qi(bi)　（代表的な接続表現は but）

e.g. Gephardt supported Gore, but Armey opposed him.　　（Kehler 2002：16）

（5）Contrast—(ii)　p(p1) and p(p2), qi(ai) and ~qi(bi)

e.g. Gephardt supported Gore, but Armey supported Bush.　　（Kehler 2002：16）

（6）Exemplification—p(p1) and p(p2), qi(ai) ⊂ qi(bi)

（代表的な接続表現は for example）

e.g. Young aspiring politicians often support their party's presidential candidate. For instance, Bayh campaigned hard for Gore in 2000.　　（Kehler 2002：17）

（7）Generalization—p(p1) and p(p2), qi(bi) ⊂ qi(ai)　（代表的な接続表現はin general）

e.g. Bayh campaigned hard for Gore in 2000. Young aspiring politicians often support their party's presidential candidate.　　（Kehler 2002：17）

（8）Exception—(i)　p(p1) and ~p(p2), qi(ai) ⊂ qi(bi)（代表的な接続表現は however）

e.g. Young aspiring politicians often support their party's presidential candidate. However, Rudy Guiliani supported Mario Cuomo in 1994.　（Kehler 2002：18）

（9）Exception—(ii)　p(p1) and ~p(p2), qi(bi) ⊂ qi(ai)

（代表的な接続表現は nonetheless）

e.g. Rudy Guiliani supported Mario Cuomo in1994. Nonetheless, young aspiring politicians often support their party's presidential candidate.（Kehler 2002：18）

(10) Elaboration — p1 = p2, ai = bi (代表的な接続表現は that is)

e.g. A young aspiring politician was arrested in Texas today. John Smith, 34, was nabbed in a Houston law firm while attempting to embezzle funds for his campaign. (Kehler 2002 : 18)

いずれにせよ，大切なのは「関係」と「対応する参与者」が共通性をもつということである。(2)

これに対して Cause-effect 関係は，命題の内部構造にまで言及することはなく，命題間の因果関係さえ読み込めればよいという種類のものである。

Cause-effect relations

(11) Result — P→Q (代表的な接続表現は and as a result, therefore)

e.g. George is a politician, and therefore he's dishonest. (Kehler 2002 : 20)

(12) Explanation — Q→P (代表的な接続表現は because)

e.g. George is dishonest, because he's a politician. (Kehler 2002 : 21)

(13) Violated expectation — P→~Q (代表的な接続表現は but)

e.g. George is a politician, but he is honest. (Kehler 2002 : 21)

(14) Denial of preventer — Q→~P (代表的な接続表現は even thought, despite)

e.g. George is honest, even though he's a politician. (Kehler 2002 : 21)

ここで P は先行命題，Q は後続命題であり，X→Y の X は推論の入力，Y はその出力である。また，この表記は logical inference を意図したものではなく，"could plausibly follow from" という日常推論的な causal relation の意味で使用されている。ここでの共通要件は，先行命題と後続命題の間にある種の因果関係が想定できることであり，命題の内部構造にまで立ち入って，対応関係や共通性を認定する必要がない。これが Resemblance タイプとの決定的な相違であり，この違いが以下の議論に重要な役割を果たすことになる。

1．2 Resemblance/Cause-effect 分類による統語現象の説明

1．2．1 VP 削除と Gapping

Kehler は VP 削除が，場合によっては構造的な平行性がなくても認められ，別の場合には平行性が必要とされることを，結束関係の違いと考えている。

(15) a. #This problem was looked into by John, and Bob did too.
[look into this problem]

b. This problem was looked into by John, even though Bob already had.
[looked into this problem] (Kehler 2002 : 56)

c. In March, four fireworks manufacturers asked that the decision be reversed, and on Monday the ICC did. [reverse the decision]. (Kehler 2002：39)
cf. John looked into this problem, and Bob did, too.

(16) a. #This letter provoked a response from Bush, and Clinton did too. [respond]
b. This letter provoked a response from Bush, because Clinton already had. [responded] (Kehler 2002：57)
c. Harry used to be a great speaker, but he can't anymore, because he lost his voice. [speak] (Kehler 2002：40)

(15) では，先行文と後続文は態（voice）が異なっているし，(16) では先行文の目的語名詞が後続文の動詞に相当するという形式的なずれが存在する。VP 削除は Resemblance文脈では，関係と参与者の平行性が必要なので，それが保持できない (15a,16a) は不可だが，Cause-effect では意味的に因果関係が読み込めればよいので，「ずれ」があっても許容されるため (15b,c)(16b,c) は可能である，というのである。もちろん (15cf.) にあるように並行的な解釈さえ成立すれば，Resemblance 文脈で VP 削除が可能であることはいうまでもない。

これに対して，Gapping は並行的な文脈でなければ認められないことが以前から知られている。(17b)(18) は因果関係的な文脈においてこの構造が認められないことを示している。

(17) a. Sandy *played* the guitar, and Betsy ϕ the recorder.
b. #Tom *voted for* Gore because/even though/despite the fact that/although Tom ϕ Bush. (Kehler 2002：85)

(18) a. Sue's histrionics in public have always gotten on Nan's nerves, but it's getting worse. Yesterday, when she couldn't have her daily Egg McMuffin because they were all out, Sue *became* upset and Nan became/# ϕ downright angry. (Levin & Prince 1986：353−4)
b. *Robin saw Leslie and so/thus/consequently/therefore, Leslie, Robin.
(Culicover & Jackendoff 2005：277)

Gapping は統語的な再構築が必要であり，関係と参与者が厳密に規定される Resemblance 文脈にしか生じないのである。しかしなぜ Cause-effect 型の文脈では生じないといえるのであろうか？この両者を分けている判断基準として Kehler が挙げているものは2つある。1つは後方照応に使えるかどうかというテストである。

(19) a. If George will ϕ, Al will *claim victory*.
b. Al will *claim victory* if George will ϕ.

(20) a. If *hei* claims victory, *Ali* will make a fool of himself.

b. *Ali* will make a fool of himself, if *hei* claims victory. (Kehler 2002 : 43)

(21) a. *If George ϕ the newspaper reporters, Al *will make a statement blasting* the press.

b. Al *will make a statement blasting* the press, and George ϕ the newspaper reporters. (Kehler 2002 : 91)

VP 削除は代名詞と同様，後方照応が可能であることから（19a，20a），代名詞類と同じく「照応表現」の一種であると考えられる。代名詞解釈の場合と同様に，先行詞は構造に依存せず意味的に決定することができる。従って基本的に Cause-effect 型の文脈で可能である（構造的な並行性は不要）。また Resemblance 型の文脈では，結束関係の制約を満たすために再構築（構造的な並行性）が必要となり，それさえ満たせば問題はなくなる。つまり，どちらの文脈でも生起することができる。

これに対して Gapping は（21a）にあるように同じ状況で後方照応できない。代名詞と振る舞いが異なるため，代名詞類のような照応表現ではない。従って代名詞類のように意味的に先行詞を決定することができず，削除部分の復元は統語的な再構築によってしか行われない。このため，文の内部構造まで対応関係を厳密に規定する Resemblance 文脈にしか生じない。

しかしこのような Kehler の考え方には問題があると思われる。まず（22）で見るように，従属節内では Gapping は後方照応でも前方照応でもいずれも不可であり，後方照応の可能性を調べるテストとしては不適切である。(21a) は単に従属節に生じないということを示しているだけであり，「後方照応」だからダメなのだ，ということを証明するテストにはなっていないということである。これに関連して，(21b) では (19b)(20b) と異なって，if ではなく and が用いられている点に注意が必要である。(19)(20) と同じパラダイムとするならば (21b) は (22b) と入れ替える必要がある。すると，後方照応だから不可能というテストとして有効でないことが理解できる。

(22) a. *If George ϕ the newspaper reporters, Al *will make a statement blasting* the press. (=(21a))

b. *Al *will make a statement blasting* the press, if George ϕ the newspaper reporters.

また，(21a) のような If P, Q という causal relation を表す表現を用いたテストの結果が容認できないものであるからという理由で，Cause-effect 型の文脈に Gapping が生じないという結論に至るというのでは，単なる循環論ではないのか，と思われる。

3つめに，(19) から (21) に関して Kehler は，「同じ統語環境」においてテストした

場合に後方照応に関する違いが生じることが重要なのだ，というかもしれない。しかし等位接続文では，代名詞も VP 削除も Gapping もすべて後方照応が不可能であり（23），前方照応だけが可能である（24）。この場合は，従属接続文の場合とは異なり，代名詞も VP 削除も Gapping もすべて接続表現との相性が問題になることはなく，純粋に照応関係が可能であるかの問題になるが，三者は全く同じ振る舞いを見せており，違いはない。また，従属接続文を用いた後方照応のテストを行った場合も，従属節側ではなく，主節側に当該の現象が生じた場合にはすべて不可となり（25），この点でも共通性が認められるのである。つまり，Kehler が提示した環境以外では，三者は「同じ統語環境」において同じ振る舞いを見せ，しかも振る舞いが異なる唯一つの環境というのは，（22）にある通り，後方照応と関係のない別の理由によって異なりが生じているのである。このような状況で，果たして「後方照応」というテストによって VP 削除と Gapping が異なっていると言えるのだろうか。

（23）a. **Hei* doesn't feel good and/but *Johni* will meet Mary.　（荒木 1986：133）

b. *John did ϕ, and I *went for a walk*.

c. *John ϕ an apple, and Bill *ate* an orange.

（24）a. *Johni* will meet Mary, but *hei* doesn't feel good today.

b. I *went for a walk*, and John did ϕ, too.

c. Bill *ate* an orange, and John ϕ an apple.

（25）a. # *Hei* will make a fool of himself, if *Ali* claims victory.

b. # Al will ϕ, if George will *claim victory*.　（Kehler 2002：43）

c. *John ϕ an apple, if Bill *eats* an orange.

更に日本語や韓国語では Gapping は代名詞と同様に後方照応的に使える（（26）（27））。すると，先ほどのテストから日本語などでは Gapping は「照応表現」であると予測されてしまう。Resemblance 文脈でなくてもよいことになり，形式的な「ずれ」があっても問題ないように思われるかもしれないが，そんなことはない。日韓両語でも Cause-effect ではダメだし（28），更に Gapping はあくまでもパラレルな解釈ができる文脈に限られている（29, 30）。つまり，英語と同じ振る舞いをするのである。

（26）a. もし彼$_i$が勝ったというのなら，太郎$_i$は全くの愚か者だ。

（pronominal cataphora）

b. 太郎は花子を，そして次郎は良子を愛している。　（Gapping）

（27）a. Manyakey　ku-ka　iki-ess-ta-ko　cwucang-ha-n-tamyen, ku-salam John-un

（If he-NOM victory-past-DEC-COMP claim-do-PRES(if), the one John-TOP papo-ta.　（pronominal cataphora）

fool-DEC)

b. John-i yeysnal khameyla-lo, kuliko Bill-un say khameyla-lo sacin-ul ccik-
(John-NOM old camera-with, and Bill-TOP new camera-with picture-ACC take-ess-ta.
PAST-DEC) (Gapping)

(28) a. *太郎は花子を，なぜなら次郎は良子を愛している（からだ)。

b. *John-i yeysnal khameyla-lo, waynyahamyen, Bill-un say khameyla-lo sacin-
(John-NOM old camera-with, because Bill-TOP new camera-with picture-ul ccik-ess-ta.
ACC take-PAST-DEC)

(29) a. *太郎は花子を（褒め)，そして良子は次郎に褒められた。 (active/passive)

b. *太郎はテーブルで（食べ)，そして次郎はみかんを食べた。
(intransitive/transitive)

(30) a. *John-i Mary-lul, kuliko Jane-un Bill-eykey chingchan-pat-ass-ta.
(John-NOM Mary-ACC, and Jane-TOP Bill-DAT praise-receive-PAST-DEC)

b. *John-i theyipul-eyse, kuliko Bill-un milkam-ul mek-ess-ta.
(John-NOM table-LOC, and Bill-TOP orange-ACC eat-PAST-DEC)

以上のことから後方照応可能性というテストではVP削除とGappingを適切に区分することはできないのではないかと思われる。もうひとつのテストとしてKehlerが提案しているのは，代名詞解釈やVP削除は直近の文に先行詞がなくても良いのに対してGappingは直前の文と対応するものでなければならない（間に別の文が介在してはならない）という局所性があることであるが，これも（31b）のような反例がありテストとして効力を持たないことは後ほど3．4節で確認する。

(31) a. *Since [John] came home [at10:00], I had to sit up very late, and [Bill] [at 11:30].

b. [John] ate [an apple] *because/when(ever)he felt hungry*, and [Bill] [an orange].

さて，Kehlerの方法論に問題があるとして，それでは我々の立場から代案を提示しなければならないが，問題はVP削除ではResemblance/Cause-effect両方の結束関係が可能であるのに，Gappingではできないのはどうしてか，ということである。さらにこれに相通じる2つの統語現象を加えて考えてみたいので，まずそれら2つの現象を紹介しておきたい。

1.2.2 Stripping と Pseudo-gapping

Gapping が2つの残留要素を残すのに対して，主語要素や副詞句要素などが1つだけ残留要素として残る Stripping (32a) という現象がある。(元々は，否定文脈に生じる逆接的な接続の場合 *e.g.* ...but not John. などに限られた用語であったが，ここではより広く，肯定的文脈の場合を含むものと考えておく)。

(32) a. John revised his paper, and Bill too.

b. *John revised his paper because Bill (too) .

c. ??John revised his paper, and therefore/and as a result Bill (too) .

d. John revised his paper quickly because Bill already had.

e. John revised his paper, and therefore/and as a result Bill certainly will too.

この現象は，(32b,c) が示すように Gapping と同様に Cause-effect 文脈との相性が悪い。[3] この環境では，(32d,e) のように助動詞が必要であり，VP 削除にする必要がある。

これに対して，Gapping に類似した Pseudo-gapping (助動詞が介在する Gapping) という現象の場合には，以下 (33c,d) と (34c,d) に示すように Cause-effect/Resemblance どちらでも生起可能である。

(33) a. *John *ate the Japanese dish* with a knife and fork, though his boss ϕ with chopsticks. (Gapping)

b. *John *took a picture* with the old camera, since Bill ϕ with the new one.

c. John *ate the Japanese dish* with a knife and fork, though his boss *did* with chopsticks. (Pseudo-gapping)

d. John *took a picture* with the old camera, since Bill *did* with the new one.

(34) a. John *ate the dish* with a knife and fork, and Bill ϕ with chopsticks. (Gapping)

b. John *took a picture* with the old camera, and Bill ϕ with the new one.

c. John *ate the dish* with a knife and fork, and Bill *did* with chopsticks. (Pseudo-Gapping)

d. John *took a picture* with the old camera, and Bill *did* with the new one.

まとめると，Resemblance 文脈では Stripping/VP 削除，Gapping/Pseudo-gapping すべての操作が可能であるのに対して，Cause-effect 文脈では Stripping と Gapping は不可能であり，VP 削除と Pseudo-gapping は可能である。つまり必ず AUX 要素が必要ということになる。

これまでの観察が他の接続表現にも当てはまるかどうかを確認するために等位接続詞の典型事例 and, or, but と周辺的等位接続詞 for, so (Huddleston & Pullum 2002, 江川

1991）を比べてみると，後者は因果関係的な接続を表す表現であることから，これまで見てきたCause-effect型の振る舞いを見せると予測されるが，事実そのようである。[4]

(35) a. John may come first, or Bill.
b. John may come first, or Bill may.

(36) a. Allan likes to play volleyball, but not Sandy.
b. Allan likes to play volleyball, but Sandy doesn't.

(37) a. John will *go* to heaven, or Bill *will* to hell.
b. John *will go* to heaven, or Bill ϕ to hell.

(38) a. John *voted* for the Republicans, but his wife *did* for the Democrats.
b. John *voted* for the Republicans, but his wife ϕ for the Democrats.

(35) から (38) にあるようにor/butはParallel/Contrastを表す接続表現であり，Resemblance文脈を形成できるのでand同様すべての構文とともに使えるが，因果関係を表すfor/soはこれとは異なり，(39) から (42) にあるようにStripping, Gappingは不可能である。

(39) a. *John revised his article, for Bill too. ('for' as a conjunction)
b. John revised his article, for Bill did too.

(40) a. *John revised his article, so Bill too.
b. John revised his article, so Bill did too.

(41) a. *John *ate the Japanese dish* with chopsticks, for his students ϕ with a knife and fork
b. John *ate the Japanese dish* with chopsticks, for his students *did* with a knife and fork.

(42) a. *John's students *ate the Japanese dish* with a knife and fork, so he ϕ with chopsticks.
b. John's students *ate the Japanese dish* with a knife and fork, so he *did* with chopsticks.

(39a) は「ビルのためにも」という前置詞としての解釈でないと不可であることに注意が必要である。

また，日本語や韓国語でも，英語と同様の現象が認められることも確認しておきたい。

(43) a. 太郎は駅へ走った。そして，次郎も。 (Stripping)
b. *太郎は駅へ走った。なぜなら，次郎も。

(44) a. 太郎は花子に，そして次郎は良子に手紙を書いた。 (Gapping)
b. *太郎は花子に，なぜなら次郎が良子に手紙を書いた（からだ）。

(45) a. 太郎は駅へ走った。そして次郎もそうした。 (do so)
b. 太郎は駅へ走った。なぜなら次郎がそうしたからだ。

(46) a. 太郎は花子に手紙を書いた。そして次郎も良子にそうした。 (do-so gapping)
b. 太郎は花子に手紙を書いた。なぜなら次郎が良子にそうしたからだ。

(47) John-i yek-ulo tallie-kass-ta. (John-NOM station-to run-PAST-DEC) (Stripping)
a. Kuliko, Bill-tota. (and Bill too-DEC)
b. *Waynyahamyen, Bill-tota. (because Bill too-DEC)

(48) John-i yeysnal khameyla-lo, kuliko/*waynyahamyen, Bill-un say khameyla-lo
(John-NOM old camera-with, and/*because Bill-TOP new camera-with
sacin-ul ccik-ess-ta. (Gapping)
picture-ACC take-PAST-DEC)

(49) John-i yek-ulo tallie-kass-ta. (John-NOM station-to run-PAST-DEC) (do so)
a. Kuliko, Bill-to kulehkey-ha-yss-ta (and Bill-too likewise-do-PAST-DEC)
b. Waynyahamyen, Bill-to kulehkey-ha-yss-ta.
(because Bill-too likewise-do-PAST-DEC)

(50) John-i yeysnal khameyla-lo sacin-ul ccik-ess-ta, kuliko/waynyahamyen
(John-NOM new camera-with picture-ACC take-PAST-DEC, and/because
Bill-un say khameyla-lo kulehkey ha-yss-ta.
Bill-TOP new camera-with likewise do-PAST-DEC) (do-so gapping)

これらの言語では，VP 削除や Pseudo-gapping に直接対応する形式は不自然であり，do so/do likewise に対応する副詞表現が必要である。この場合は助動詞ではなく，代動詞が含まれていると考えられるが，しかしいずれも predicate 要素が存在しているという点では共通している。日本語でも韓国語でも，Stripping/Gapping は Resemblance 文脈にしか生じないが，Cause-effect 文脈でも predicate 要素が含まれる形態になれば用いることが可能となる。

以上の観察からわかるように，ここで問題にしようとしている非対称性は通言語的な性格を持つものであると考えられるので，できる限りシンプルな解決法を模索するべきであると考える。以下，この精神に則って，代案を提示してみたい。

2．理論の修正提案

2．1 Resemblance relation の多様性

Kehler は先述の通り，Resemblance/Cause-effect どちらの結束関係についても，命題レベルの関係しか想定していない。そのため Stripping/Gapping でも文レベルの表現であるは

ずで，削除されている部分を再構築しなければならない，と考えている。しかし，これらの表現の場合，表面にあるのは単なる phrase レベルの要素であり，見たままの句要素として考え，文にまで再構築しなければならない，と考える必要はないのではないか。そのようなシンプルな見方で考えてみたい。

Kehler は命題レベルの結束関係のみを問題にしているが，しかし並行的な結束関係は命題間のみならず，句レベルの表現の間でも認められるのではないだろうか。句レベルの表現であっても，同じ特性を共有しているという点において，並行的であると見なせるはずである。すると Stripping は統合型の phrasal coherence domain（51a）ではなく，分離型の phrasal coherence domain（51b）と捉えなおすことができるのではないだろうか。（以下，coherence relation が保持されている領域を coherence domain と呼ぶことにする。）主語の二人が個別的解釈を受ける場合には，文字通り，個別的に叙述内容と関わることから，分離が可能となり（51a,b）の二つの具現化があり得るのだと考えてみてはどうだろうか。

（51）a. [John and Bill] went to the station.　（統合型の phrasal coherence domain）

b. [John] went to the station, and [Bill] too.

（分離型の phrasal coherence domain）

更に1つの文に phrasal coherence domain は1つしか現れない，という制限はないので，複数の domain が登場することもある。それらが個別的に解釈され，線形順序にあわせてそれぞれ対応する場合には，分離型で現れると Gapping になると考えてみてはどうだろうか。

（52）a. [John and Bill] admire [Mary and Jane], respectively.

b. [John] admires [Mary] and [Bill] [Jane].

ちなみに，（52a）の統合型のドメインの場合には，可能な解釈はいくつか存在するが，ここでは Gapping 形式に対応する解釈の場合だけを扱いたいので，respectively を挿入している。ドメインの統合・分離によって，生じる解釈が全く同じになるということは保証されていないが，これは配列形式に変更が加えられることにより，それに対応する意味解釈にも変更が加えられるものと考えればよい。形式が異なれば，表現しうる意味解釈も異なるというのは，別に不思議なことではない。この場合，複数の統合型ドメインが存在する場合には，個別的に解釈されるといってもいくつかの場面解釈が可能であるのに対して，2つあるドメインの両方を分離型にしてしまうと，可能な解釈は1つのパターンにしぼられることになってしまうのである。ここで問題にしたいのは，Gapping に対応する解釈だけであるため，当該の統合型ドメインの事例に関しては，以下の例においても respectively が挿入されている。(5)

さて，これに対して，VP 削除は助動詞の存在からも，形式的に命題レベルの表現であ

り，句レベルの表現とは異なる削除現象であると考えられる（53）。

（53）a. [John played basketball] and [Bill played basketball] too.

b. [John played basketball] and [Bill did] too.

（54）のようにCause-effect文脈ではStrippingが不可能でVP削除でなければならないのは，因果関係というのが命題間の結束関係だからであると考えればよい。「主語＋助動詞」は，時制を伴った主述関係が存在することを保証する最低限の形式であり，命題の存在を保証する。この形式が最低限備わっていないとCause-effect関係の被接続表現になれないはずである。これに対してStrippingは文字通り句レベルの表現でしかなく，Cause-effect文脈の制約に合致しないと考えられる。

（54）*[John] played basketball, because [Bill] (too).

これに対して（55）のPseudo-gappingはVP削除と同様に助動詞が存在し，命題レベルの表現であるため，Cause-effect文脈でも生じることが可能である。

（55）a. [John admires Mary] and [Bill admires Jane].

b. [John admires Mary] and [Bill does Jane].

すると（56a）ではPseudo-gappingが命題を構成していることから，Cause-effect文脈で生起することが可能となり，これと最小対立をなすGappingの例（56b）は句レベルの要素が並置されているだけであり，命題表現を構成できていないことから不可能であると説明できる。

（56）a. John took a picture with the old camera, since Bill *did* with the new one.
（＝33d）

b. *John took a picture with the old camera, since Bill with the new one.
（＝33b）

つまりStripping/Gappingは見たとおりbare argumentsがあるだけで，文レベルの要素ではなくdomain splitであると考え，VP削除やPseudo-gappingについてはKehlerと同様に，文レベルの表現であると考えることになる。[6],[7]

上記のようなinformalな考えを制約として定式化するために，意味，統語の2つの側面から，続く2つの節で制約を立ててみたい。

2.2 意味的制約としてのResemblance Relation認定

前述のように，Resemblance関係には少なくとも2つのレベル分けが必要であると考えられる。命題レベルの場合，これはKehlerが述べているとおり，共通する関係と，それに参与する参与者の特性の共通性が必要であるが，それ以外に句レベルの類似関係があり，このときは対応する参与者同士の特性の共通性が認定されるだけでよいのではないだろうか。そ

こで，以下のような提案を行う。

(57) 提案：Resemblance relation を phrasal/propositional の2つのサブタイプに分類する。たとえば，典型事例の Parallel の規定内容は，以下のような形式になる。

(58) Parallel: (i) *qi(ai) = qi(bi)* for a phrasal coherence domain

(ii) *p(p1) = p(p2), qi(ai) = qi(bi)* for a propositional coherence domain

これに対して Cause-effect 型の結束関係はあくまでも命題レベルのものであり，変更は加えないこととする。[8] これが semantic constraint であると考える理由としては，以下のような例を挙げておきたい。

(59) a. *[John and the key] opened the door.

b. John is [a Republican and proud of it]. (Sag *et al.* 1985：117)

c. We walked [slowly and with great care].

(60) a. John and Mary

b. John and someone

c. John and no one

(59a) にあるように，NP という同一カテゴリー要素であっても，意味機能が異なれば phrasal coherence domain を形成できないし，逆に (59b,c) にあるようにカテゴリーが異なる場合であっても，意味機能が共通していることで coherence domain を形成できることもある。また (60) にあるように，固有名詞同士の場合と固有名詞と不定名詞，さらには固有名詞と非指示的名詞の組み合わせでは，微妙ではあっても前者の方がより並行性を認識しやすいということもある。意味的特性の共通性が認められることで，coherence domain の要素として認定できるかどうかに違いがあるのであり，段階性のある概念と考えられるからである。

2.3 統語的制約としての Phrasal Coherence Domain の具現化

次に，phrasal coherence domain が統語的にどのように具現化可能であるかについての制約を考えてみたい。

(61) 提案：distributive phrasal coherence domain は2つの具現化がありうる。

a. [..... [*X Conj Y*] distributive .....]s (統合型)

b. [..... [X] distributive .....]s Conj [Y] distributive (分離型)

(62) collective phrasal coherence domain は1つの具現化しかない。

a. [..... [*X Conj Y*] collective .....]s (統合型のみ)

b. *[..... [X] collective .....]s Conj [Y] collective

X, Y... phrasal constituents; s... minimal clause containing the coherence domain

上記のように個別的（distributive）な解釈の場合にのみ2つの具現化の option が与えられると考えてみる。このときには，coherence domain を含む minimal clause に付加する形で，一方の conjunct が分離して現れることも可能となる。そして，この制約は線形順序に従って recursive に適用され，複数のドメインが分離すると Gapping が生じることになる。

ところで（61a/b）の Conj（unction）の機能は異なることに注意が必要である。前者は domain 統合のために必要な Conj であり，coherence domain 内の要素である。後者では domain は分離するので，統合のための接続詞は不要である。ここにある Conj は先行する節内容に Y を付加するために働いている接続要素である。両者は別物であり，domain 統合に利用された Conj がそのまま後ろに移動するというのではない。Gapping でも2つの domain が分割されるが，それ自体は後続要素として bare arguments が2つ併置されるというだけである。その arguments と先行する文を接続するために Conj が1つ間に入ってくるということである。domain 統合の Conj が後ろに移動すると考えると，Gapping では Conj が2つ後ろに登場することになるはずだが，そのようにはならない。そのため（61）でも b タイプの表現では Conj を太字にしていない。これは coherence domain の要素ではないということを示したいための表記である。

このように考える理由としては，例えば Gapping で and などの Conj は必ずしも必要ではないことが一つめの理由としてあげられる。

（63）Peter plays first base; Betsy second base.　（Sag 1976：139）

つまり，等位接続詞は，この構造にとって必須の要素なのではないということであり，先行文と後続表現の意味的なつながりを具現化するために使用されている接続詞なのである。同じような例としては，

（64）a. [The Red Sox and the Yankees], [six and/to nothing].

b. [The Red Sox] [six], [the Yankees] [nothing].

（Culicover & Jackendoff 2005：276）

これはテレビ中継などの決まり文句であるが，統合型の形式で表す場合には接続表現が必要であるが，分離型で表した場合には，接続詞は不要である。

また否定文の場合に，Stripping/Gapping で接続詞が否定形になることも挙げられる。

（65）a. [John and Bill] didn't come to the party.

b. [John] didn't come to the party, nor [Bill].

c. [John and Bill] don't like [the Democrat and the Republican], respectively

d. [John] doesn't like [the Democrat], nor [Bill] [the Republican].

統合領域内には否定の情報がないので，領域分割を行った場合には，先行文と後続表現

の間の意味関係を表すために，否定接続詞が選択される。これは，領域統合の接続詞がそのまま利用されているのではないということであり，前後関係を適切に表す接続詞が選択されるということになる。ちなみにこれに対して，分離される領域内に否定要素が含まれているのであれば，接続表現を否定形にする必要はなくなる（66）。

（66）[Few people] came [to the conference], and [almost no one] [to the reception].

さらに，Gapping で対比を示す but を認めるかどうかについては判断が分かれるところであるが（これには本来 Gapping が対比的な文脈でしか用いられないということとの，機能的な重複があることが理由かもしれないが），結局のところ先行文と分離要素の関係を「対比的」なものと明示したい場合に，and ではなく but が選択されると考えればよいのではないだろうか。

他にも Stripping/Gapping などでは，as well as/not to mention/let alone などの接続表現も認められるので，領域統合のための接続詞と，分離型の領域になったときに現れる接続詞は異なるものであると考えるべきだろうと思われる。

（67）a. Robin speaks French, as well as/not to mention Leslie, German.

b. Robin doesn't speak French, let alone Leslie, German.

（Culicover & Jackendof 2005：278）

例えば let alone の場合，（68）が不可能であることから，統合領域の接続詞であった let alone が後ろに移動したと考えることも難しいと思われる。

（68）*[Robin let alone Leslie] doesn't speak [French let alone German].

Fillmore, Kay & O'Conner（1988）は，let alone が複数回単文内に生じることが原理的には可能であるとしているが，実際には1度使われるのみであるとも指摘しており，（68）のような表現は著しく容認性が低いものであることは確かであると思われる。

（67b）のような表現は，例えば Robin and Leslie don't speak French and German, respectively. のような表現に対応するものとして，ドメイン分割された内容が，先行文と否定的な関係でつながることと，更にその否定内容を，ある意味的なスケール上の極点を表すように強調する必要があることなどの要請によって接続詞が選択され，nor/let alone などの可能な接続表現のうちから選択されると考えてみてはどうだろうか。

もう一点，（61）に関して注意が必要なことは，この分離・統合型の具現化はオプションであって，必ずしも必要な操作ではないということである。例えば，{John and Bill} broke {a table and a chair}. という文を考えてみると，この文には少なくとも4通りの解釈があり得る。

（69）{John and Bill} broke {a table and a chair}.

a. {John/Bill} broke {a table/a chair}（collective group 同士の間での出来事。

Subevent は1つと見なされている。）→分離形態は存在せず，他の表現形式は存在しない。

b. {John} broke {a table/a chair}, {Bill} broke {a table/a chair}（一方が distributive，他方が collective な場合。subevent は2つあると見なされている。）→別の表現形式として {John}distri broke {a table and a chair}colle, and {Bill}distri, too. がある。

なお，このタイプは目的語が distributive になるパターンもあり，このときは {John and Bill}colle broke {a table}distri, and {a chair}distri, too. と表現することも可能である。

c. {John} broke {a table}, {Bill} broke {a chair}（両方が distributive で個別対応する場合。subevent は2つあると見なされている。）→別の表現形式として {John}distri broke {a table}distri, and {Bill}distri {a chair}distri. がある。

d. {John} broke {a table}, {John} broke {a chair}, {Bill} broke {a table}, {Bill} broke {a chair}（両方が distributive で各組み合わせがすべて実現する場合。subevent は4つあると見なされている。）→別の表現形式として {John}distri broke {a table and a chair}distri, and {Bill}distri, too. または {John and Bill}distri broke {a table}distri, and {a chair}distri, too. がある。

(69a) の場合は，domain split は不可能なので，主語も目的語も統合 domain として表現するしかない。(69b) の場合は，主語だけが distributive であり，こちらだけは domain split を起こすことが可能である。(69c) の場合は，主語も目的語も distributive であり，split させるなら，両方とも split させなければならない形式である。(69d) は，両方 distributive であるが，一方だけを split させることができる場合である（そうしないと，(69c) と同じ形式になってしまう）。ここでは (69c) (69d) に関して，潜在的に split 可能である domain を実際に split させるかどうかの選択を行うことによって，形式的な違いが生じ，意味解釈の違いを表現できると言うことになる。また，統合型の domain は，disributive/collective の両方の解釈可能性があるので，(69b) (69d) では，split しない側の domain が distributive であるか，collective であるかによって解釈が変わることになっている。Domain split という option を利用することによって，表題の文章に含まれる4つの解釈は，個別に表示することが可能となる。が，一方でこれらの解釈はすべて (69) の表題の文が表しうる解釈であり，domain split を全く利用しない形でも表せるものである。ここでは，複数のドメインがある場合にどちらも分離する Gapping 形式を問題にしているので，(69c) 型のみを扱うことになる。この解釈の場合の表題の文章を統合型の表現として扱いたいために，関連する文にはすべて respectively を挿入しているのである。

さて，(62) の場合についてであるが，これは以下にあるように symmetric predicate (Lakoff & Peters 1966) や collective action を表す場合に domain 分割が行われないことを保証するものである。

(70) a. [John and Bill] collective are similar. (symmetric predicate)

b. *John is similar, and Bill too.

(71) a. [John and Bill] collective drew a picture (together). (collective action)

b. *John drew a picture, and Bill (together).

意味的に考えても，参与者が分離可能であるのは，個別的に事態に関わっている場合であると思われ，集合的に関与しているのであれば，分離表現の形態をとらないのは当然と考えられる。

もう一点注釈を加えておくと，たとえ distributive な解釈でも (61a) の coherence domain を形成していない場合には分離型の表現は存在せず，単一の表現形式しかない場合もある。

(72) [They] came in for the party. (distributive)

3. 修正理論の適用

前節で考察した内容と，設定した制約がどのように適用できるかをこの節で検討してみる。

3.1 他の Resemblance relations の phrasal domain 事例 (BNC からの用例)

(57) から他の resemblance タイプでも phrasal coherence domain が認められるはずと予測されるが，事実その通りである。

(73) Contrast (A but not B) :

a. You can cross a river [on a tree-trunk, but not on a chip of wood].

b. [Several countries, but not the UK] have radio-paging systems based on RDS....

(74) Exemplification (for instance, for example) :

a. [Some anthropological researchers, such as for example Burton], also identify neighborhoods and even towns by pseudonyms.

b. Schools are also bound to be affected by [statements such, for example, as those of the Secretary of State for Education and Science].

(75) Generalization (or more generally) :

a. ...since [the class-struggle, or more generally the struggle against oppression], is thought of as always visibly at work in history in a clearly timeless way.

b. Sometimes it is necessary for the specialist teacher to be available to help in providing solutions for specific problems that arise [in the classroom or more generally in the school].

(76) Exception(except) :

a. [Everybody except the best man] went to the rails for Holy Communion.

b. You have a right to know what is in [all those products except the beer].

(77) Elaboration (namely, that is) :

a. The further division of Railfreight into [five subsectors, namely Coal, Construction, Petroleum, Metals and Distribution], has exposed the strengths and weaknesses of individual traffic flows.

b. Like good driving, organization is conducted in [two phases namely planning and implementation].

3．2 他の resemblance relations の domain split

(61) から，統合型ばかりではなく，分離型もすべての resemblance relations に関して存在するはずであるが，これもすべて可能である。

(78) Contrast

a. Political attitudes were [very largely] determined by partisanship, but not [completely].

b. His mind [usually] stayed at the level of gossip and anecdote, but not [always].

(79) Exemplification

[Many famous players] gathered at the party, such as [Paxton, Miller and Johnson].

(80) Generalization

a. [Problems in the classroom] are getting serious, or more generally, [problems in the school].

b. [Class-struggle] is always visibly at work in history, or more generally [the struggle against oppression].

(81) Exception

a. [Everybody] came in for the party, except [John].

b. [All the products] contain artificial preservatives, except [this mineral water].

(82) Elaboration

[All the guests] came in for the party, namely [John, Bill, Mike, Harry and Tom].

つまりここで問題にしている phrasal coherence domain は Parallel にのみ当てはまる現象ではなく，Resemblance Relations 全般に当てはまる現象である，ということである。[9],[10]

3.3 顕在化要素のカテゴリー

統合型の phrasal domain は，あらゆる範疇要素に関して存在するので，分離型の Stripping や Gapping も様々な範疇の要素が生じるはずである。実際に，よく知られているように (83) や (84) で，さまざまな範疇要素が分離形態をとることが可能である。

(83) a. [John] is proud, and [Bill] too. [NP Subj conj]

b. John admires [Mary] very much, and [Jane] too. [NP Obj conj]

c. John is [proud], and [lofty] too. [AP conj]

d. John found ants [on the roof of the house] yesterday, and [in the basement] too. [PP conj]

e. John [ran to the house], and [hid in the basement] too. [VP conj]

f. It is important [that you take good care of her], and [that she obey your instructions], too. [CP conj]

(84) a. [John] is [honest], and [Bill] [clever]. [NP conj, AP conj]

b. [John] wants to cook the meals [today], and [Peter] [tomorrow]. [NP conj, ADVP conj]

c. [John] tried to interview some candidates [this morning], and [Peter] [this afternoon]. [NP conj, ADVP conj]

d. [John] took a picture [of the queen], and [Bill] [of the king]. [NP conj, PP conj] (岡田 2002：247)

e. [Paul Schachter] has informed me [that the basic word order in Tagalog and related languages is VOS]; [Ives Goddard] [that the unmarked order in Algonkian is OVS]; and [Guy Carden] [that the basic order in Aluet is OSV]. [NP conj, CP conj] (Ross 1970：250)

f. [On Sundays] [Robin] speaks French to Bill, and [on Mondays] [Leslie]. [PP conj, NP conj] (Culicover & Jackendoff 2005：273)

これに対して，Cause-effect 型の接続関係は，(57) で見た Resemblance の場合と異なり，命題レベルの結束関係でしかないことから，(61) にある phrasal coherence domain をそもそも形成することができず，統合型も分離型の domain 形成 (Stripping, Gapping) も不可

能であるといえる。ここに意味的な制約と統語的な制約のインターアクションが認められる。前節では，Cause-effect 型の表現は phrase レベルの表現を接続対象にできないために不可能であると述べたが，より正確には統合型，分離型どちらの phrasal coherence domain も形成できない，というべきであろう。

(85) a. *[John because/although Bill] came in. ------- *[John] came in because/although [Bill], too.

b. *John is [proud because/since a member of Parliament]. ------- *John is [proud], because/since [a member of Parliament], too.

c. *[John and therefore/as a result Bill] came in. ------- ??[John] came in, and therefore/as a result [Bill], too.(11)

3.4 Stripping/Gapping の局所性

(86) の統合型の coherence domain に対応する分離型の phrasal domain (87) では後続部に現れる分離要素を別の節表現内に埋め込むことはできない (bare arguments しか登場してこない)。このことは (61) から直接予測できることである。

(86) a. [John and Bill] ate the dish with a knife and fork.

b. [John and Bill] ate the dish [with a knife and fork and with chopsticks] respectively.

(87) a. *[John] ate the dish with a knife and fork, and *I remember that* [Bill], too.

b. *[John] ate the dish [with a knife and fork], and *I remember that* [Bill] [with chopsticks].

これに対して (88) のように統合型の coherence domain を含む主節に対して従属節が後続する場合を考えてみると，(89) にあるようにこの節を超えて分離しても問題はない。because 節や when 節などは主文の否定時 not のスコープに入る解釈があったり，cleft 文の focus 要素になったりする (Nakajima 1982) ため，主節の一部を構成する要素であると考えられる。仮にこの従属節を主節に含まれる要素と考えれば，ここまでを含めて (89) の下線部全体が coherence domain を含む最小の節領域と考えることができる。すると，このような従属文が間に介在することは可能であることになり，(89) が可能であることを (61) から予測できる。別の文が間に介在しても可能な場合 (89) とそうでない場合 (87) があることになり，Kehler の予測する Stripping/Gapping の局所性 (間に文が介在できないから照応表現とは異なるとする考え方) は守られないことになる。

(88) a. [John and Bill] ate an apple *because / when(ever) they felt hungry.*

b. [John and Bill] ate [an apple and an orange] respectively *because / when (ever) they felt hungry.*

(89) a. [John] ate an apple *because / when(ever) he felt hungry,* and [Bill], too.

b. [John] ate [an apple] *because / when(ever) he felt hungry,* and [Bill] [an orange]. (=(31b))

ちなみに，結果の so that 節などは主節否定辞のスコープに入らず，cleft 文の focus 要素にもなれないことから，かなり従属節としての独立性が高く，??John ate an orange so that he quenched his thirst, and an apple, too. のような表現は言いにくい。それぞれの従属節表現が，主節の S 節点の内側なのか外側なのか，細かく検討する必要はあると思われるが，ここではとにかく先行詞文と Stripping/Gapping 要素の間に別の文が介在できるかだけを問題にしているので，従属節のタイプと介在可能性の関係は扱わないことにしておく。

これに対して，従属節内の統合ドメイン（90a）は，その節内で分離することはできても（90b），主節を超えて分離することはできない（90c）。従属節に coherence domain が含まれる場合には，それが最小の節領域とみなされ，その節の直後に隣接する形でしか分離させることができない。

(90) a. Since [John and Bill] came home [at 10:00 and at 11:30], respectively, I had to sit up very late.

b. Since [John] came home [at 10:00], and [Bill] [at 11:30], I had to sit up very late.

c. *Since [John] came home [at 10:00], I had to sit up very late, and [Bill] [at 11:30]. (=(31a))

3．5束縛関係

Kehler（2002：92–93）は Gapping に厳密な再構築を行うことが必要であると考える論拠として束縛関係にかかわる事実を挙げている。先行文の削除された部分をそのまま後続部にコピーして復元することで，(91a) では sloppy 解釈のみが許され，(91b,c) はそれぞれ後続文が束縛条件の B と C に違反するために非文となるとしている。しかし，このように述部を復元することを考えなくても，同様の説明は可能であると思われる。

(91) a. George$_i$ bought himself$_i$ a book on health care, and Al$_j$ <*bought himself$_j$*> a book on the environment. (sloppy reading のみ可能)

b. *George$_i$'s mother bought him$_i$ a book on health care, and George$_i$ <*bought him$_i$*> a book on the environment.

c. *Dick bought Georgei a book on health care, and Georgei <*bought Georgei*> a book on the environment. (Kehler 2002：92-93)

(91) の分離型 domain に対応する統合型の表現を考えてみる (92)。

(92) a. [Georgei and Alj] bought themselvesi+j [a book on health care and a book on the environment], respectively.

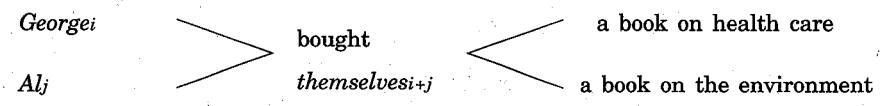
b. *[George's motherj and Georgei] bought himi [a book on health care and a book on the environment], respectively.

c. *[Dickj and Georgei] bought Georgei [a book on health care and a book on the environment], respectively.

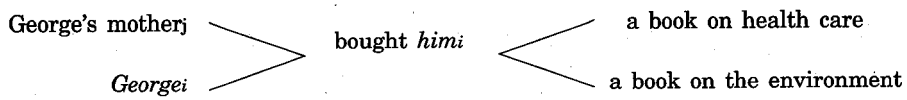
(92) で統合型の coherence domain が distributive な解釈を受け，線形順序にあわせて対応する場合，Goerge が自分に，Al も自分に本を買っているという解釈しか存在しない。これを domain 分割して分離すれば (91a) の形式になると考えられる。このとき sloppy 解釈に相当するものしか，解釈として生じないことは統合型の表現において保証されていると考えればよい。

(91b,c) の domain 分割型の非文に対応する domain 統合型の表現も (92b,c) にあるように非文である。仮に，統合型領域内の要素（つまり (61a) のタイプの具現化の場合）は Goodall (1987) で想定されているように，統語的には互いに支配関係も先行関係もない要素であると考え (PF で線形化のルールが適用される)，個別的解釈を受ける要素である場合には，それぞれ個別に束縛関係を結ぶものと考えてみる。すると，(92a)' では George と Al が個別に目的語位置の再帰代名詞を束縛し（複数の束縛関係が同時に成立していることは，例えば John and Mary saw himself and herself, (respectively). が可能である (Goodall1987：58) ことからも判明する)，その再帰代名詞が形態的に複数化していると考えればよい。そして，(92b)'(92c)' は束縛条件違反の例として Kehler と同じように説明できるのではないだろうか。そして，統合型の domain 形成が非文法的であれば，対応する分割型の coherence domain の形成も無理であるということで，(91b,c) の非文法性も説明できるのではないかと考えられる。[12]

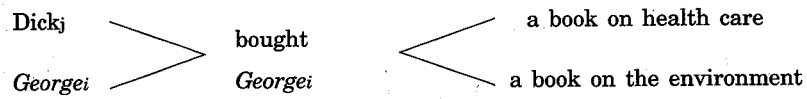
(92a)'



(92b)'



(92c)'



(adapted from Goodall 1987)

これに対して Collective な解釈になる場合，統合型の domain を分割することはできない。大事なのは，この場合いずれの文も問題が無くなるということである。この場合は統合 domain 内の要素全体（グループ全体）に対してひとつの index が与えられる（つまりそれぞれの要素が個別に束縛関係を結ばない）ため，目的語位置の代名詞や固有名詞とは異なる index を与えられ，問題が生じないと考えることができる（93）。なお，ここでは目的語名詞句は束縛関係と関わらないため，単一名詞に変えて簡略化しておく。

(93) a. [George and Al]i *together* bought themselvesi a book on health care.

b. [George's mother and George]i *together* bought him (=George)k a book on health care.

c. [Dick and George]i *together* bought Georgek a book on health care.

また，意味的に考えても collective reading の場合には他の表現形式を使うのも難しく，当該の場面状況を説明するために必要な表現形態である。これに対して distributive の場合は一文にまとめる必要がそもそもなく，(92b,c) やそれを分割した (91b,c) ではなく (94a, b) のような別個の 2 文にすれば最初から何の問題も生じない。

(94) a. George's mother bought *him* a book on health care, and George bought *himself* a book on the environment.

b. Dick bought *George* a book on health care, and George bought *himself* a book on the environment.

もしそうなら，束縛関係の事例についても，ここで考えたような論法のほうが説明できることが多くなるのではないかと考えられる。

3.6 Non-finite clause の場合

これまで finite clause の例を見てきたが，non-finite clause の場合でも，Cause-effect で

は Stripping/Gapping は不可能であり，何らかの述部要素の存在が確保される場合に限って Cause-effect 文脈でも容認されるようである。

(95) a. [With *John's father and mother* behaving gently to Mary], she could feel quite at ease on the first encounter. (simple conjunction)

b. [With *John's father* behaving gently to Mary, and *his mother* too], she could feel quite at ease on the first encounter. (Stripping)

c. [With *John's father* behaving gently to Mary, and *his mother* doing likewise], she could feel quite at ease on the first encounter. (do-likewise)

d. [With *John and Bill* behaving gently to *Mary and Jane, respectively*], the trip they are planning will certainly be a happy one. (respectively construction)

e. [With *John* behaving gently to *Mary* and *Mary* to *his mother*], the three of them would make a happy family. (Gapping)

f. [With *John* behaving gently to *Mary* and *Mary* doing likewise to *his mother*], the three of them would make a happy family. (do-likewise Gapping)

(96) a. *[With John strongly making advances to Mary, because of Bill], the trip that the three of them are planning now would be a disaster. (Stripping)

b. *[With John behaving gently to Mary because of Mary to his mother], the three of them would make a happy family. (Gapping)

c. [With John strongly making advances to Mary, because of Bill doing likewise], the trip that the three of them are planning now would be a disaster. (do-likewise)

d. [With John behaving gently to Mary because of Mary doing likewise to his mother], the three of them would make a happy family. (do-likewise Gapping)

これらの場合において，doing so/doing likewise のように，助動詞 do ではなく，代動詞の do が用いられていると考えられる。これは，non-finite 節において modal auxiliary が生じることができないことからも支持されることであると思われるが，この文脈においては助動詞の生起が何らかの理由によって妨げられるためと考えられる。このような特殊な事情があるが，ここでも，これまでに観察してきた4つの統語現象に関しては，finite 節の場合と並行的な振る舞いが認められる。(日本語や韓国語について do so/do likewise に相当する表現が必要となることについて同様の議論ができるかどうかは，ここでは扱えない問題であるので保留させていただく。) (96a) に関しては，この文章自体は問題がないが，Stripping

の解釈にはならない，ということに注意が必要である。「ビルのせいで」という通常の because of NP の解釈は可能であり，「ビル（がメアリーに同じように言い寄ったから）」という解釈にはならないのである。

3.7 Conjunction Reduction（Left Peripheral Gap）

ここでは Conjunction Reduction を右端列の複数構成素が接続対象となる場合を指すものと考えておく。ただしこのように複数構成素が並置される場合を特に Left Peripheral Gap と呼び，Conjunction Reduction と区別する立場もある。(98) がその具体例である。

(97) a. I gave [$10 and $5] [to Kim and to Pat], respectively.
b. Jill bought [Kim and Pat] [a T-shirt and some shorts] respectively.
c. I sent [Ed and Sue] [a letter and a postcard] [on Monday and on Friday] respectively.

(98) a. I gave [$10 to Kim] and [$5 to Pat].
b. Jill bought [Kim a T-shirt] and [Pat some shorts].
c. I sent [Ed a letter on Monday] and [Sue a postcard on Friday].

(Huddleston & Pullum 2002：1341)

ここでの立場から分析を行うと，(97) のような統合型の domain ではなく，Gapping と同様に複数のドメイン分割が行われると，(98) のような Conjunction Reduction の形式になると考えればよい。ただし，Gapping と違うのは，それぞれの構成素の組み合わせの間に別の要素が介在せず直接隣接しているということである。ちなみにこの構造が Gapping と類似していることが Hankamer (1973)，Kuno (1976) などでも述べられている。

統合型，分離型のいずれにしても共通特性を持たない要素同士が coherence domain を形成することはできないので，(99a) や (100a) は不可となる。

(99) a. *John kissed [Louise] [tenderly] and [Mary] [yesterday].
b. John kissed [Louise] [tenderly] and [Mary] [passionately]. (Goodall1987：34)

(100) a. *John kissed [Louise and Mary] [tenderly and yesterday] respectively.
b. John kissed [Louise and Mary] [tenderly and passionately] respectively.

また Cause-effect 型の接続表現では，命題レベルの接続対象が求められるため，この性質を欠いた表現は基本的に良くない (101)。これは Gapping の場合と同様である。

(101) a. I gave [$10 to Kim]*since/*although/??and as a result [$5 to Pat].
b. Jill bought [Kim a T-shirt]*since/* although/??and as a result [Pat some shorts].

ただし，and を利用した and therefore/and as a result などは注3や注11でも述べたよう

に，Cause-effect 型と Parallel 型の両方の中間的なところにあると考えられるため，少しましである。これらの場合は，接続表現の前後にポーズを置くことによって改善される。直接接続される形式として，ポーズなしでフラットに読まれるとよくないようである。命題的な表現となるように（ポーズを置くことによって）欠損している部分を埋めて再解釈することができれば容認性があがるのに対して，純粋にその部分だけが被接続部であると解釈される（ポーズなしの）場合にはやはり容認性は低くなるようである。

また，局所性に関しても（102）の統合型に対応する分離型の（103）にある様に，Gapping の場合と同じく，間に従属節が介在することは可能である。逆に主節表現が間に介在することはやはりできない（104）。

(102) a. I gave [$10 and $5] [to Pat and to Mary], respectively, *because / when(ever) they asked.*

b. Jill bought [Mary and Pat] [a T-shirt and some shorts], respectively, *because / when(ever) they asked.*

(103) a. I gave [$10 to Pat] *because / when(ever) he asked,* and [$5 to Mary].

b. Jill bought [Mary a T-shirt] *because / when (ever) she asked,* and [Pat some shorts].

(104) a. Since I gave [$5 to John] and [$8 to Bill], *Harry demanded more.*

b. *Since I gave [$5 to John], *Harry demanded more,* and [$8 to Bill].

Conjunction Reduction に関して，他にも Gapping や Stripping と類似している点としては，接続表現を（informal speech で）省略することが可能であることや，接続表現として as well as, not to mention, let alone などの多様な表現が選択できることなどが挙げられる。

(105) a. John gave [$5to Pat], [$10 to Jane]

b. John sent [Mary a letter on Saturday], [Jim a package on Sunday].

(106) a. John donated $10 to the society, as well as $5 to the charity.

b. John donated $10 to the society, not to mention $5 to the charity.

c. John didn't donate $10 to the society, let alone $5 to the charity.

ここでも分離型の coherence domain を前文につなぐために用いられている接続表現は，2.3節で述べたように統合型の coherence domain 形成に用いられている接続表現とは別物であると考えられる。

3.8 Right Node Raising

ここでは Right Node Raising を左端列の複数構成素が接続対象となり，かつ共通する右辺要素が単一構成素を成している場合と考えておく。

(107) [I enjoyed] although [everyone else seemed to find fault with] her new novel.
(Huddleston & Pullum 2002 : 1344)

(108) a. [I could], because [they did], enjoy the stage performance.
b. [I couldn't], even though [they did], enjoy the stage performance.

(109) [I could] and [they did] enjoy the stage performance.

Right Node Raising は Resemblance/Cause-effect どちらの文脈においても可能である。VP 削除と同様，最小限 S+AUX が存在すれば接続対象が命題形式を保持していることになり，(108) のパターンは可能になる。例えば，(108a) では I could X because they did X という open proposition 同士の間で，「彼らが X をやったので，私も X できた」という causal relation が成立していると考えられ，この X の値が Right Node Raising によって取り出されている動詞句の内容である，と想定することができる。Resemblance の場合も命題を接続対象とすることができるので (109) も適格である。

ちなみに左端列が倒置を起こして S+AUX のコンビネーションで無くなると，Cause-Effect は不可能になる (110c) のに対し，Resemblance 文脈ではやはり可能である (110b)。[13]

(110) a. [In the morning and in the afternoon] [the prosecution and the defense] respectively presented their cases.
b. [In the morning the prosecution] and [in the afternoon the defense] presented its case. (Banfield 1981 : 11)
c. *[In the morning the prosecution] because/and therefore [in the afternoon the defense] presented its case.

4．まとめ

Resemblance 型の結束関係は命題レベルの関係には限定されないと考えることによって，さまざまな統語現象に対しての説明が可能になり，テキストレベルの結束関係という概念の文法事象に対する有効性を示すこともできる。また，Cause-effect 型の結束関係との違いもより明確になる。想定したことは2つ（i）個別的解釈を受ける phrasal coherence domain は2つの具現化のパターンがあるが，集合的解釈を受ける phrasal domain や命題レベルの coherence domain はそのようなオプション性がないということ（ii）Resemblance は phrasal domain でも維持されるのに対して，cause-effect は命題レベルの domain でのみ保持されるということ，であった。この意味・形式の両方からの視点を利用することで，よりシンプルな，目に見える形そのままを重視した説明が可能になったのではないかと考える。[14]

＊本稿は，岡田 (2004／2005) の内容を加筆修正し，大幅に書き直したものである。なお，

英語のデータに関しては，神戸市外国語大学の Mark Campana, Donna Tatsuki, David Farrah 各先生に協力をいただき，韓国語のデータについては本学の鄭聖汝先生にご協力いただいた。感謝申し上げる。

註

（1）近接関係（contiguity）のカテゴリーに入るサブタイプとして1つ想定されているのは Occasion という関係である。

Occasion (i) Infer a change of state for a system of entities from S1 inferring the final state for this system from S2.

Occasion (ii) Infer a change of state for a system of entities from S2 inferring the initial state for this system from S1.

e.g. George picked up the speech. He began to read. （Kehler 2002：22）

連続する2文を比べて，参与者に何らかの状況変化が生じていることが認められる場合，その文間に認められる結束関係であり，時間的な推移などは一つの事例と考えられる。

（2）（6）から（9）までの「属性」に関する部分集合の表記に関しては，対応する「要素」の集合の包含関係の場合とは逆の集合関係になっている。これは，より specific な要素の持つ属性の方がより general な要素の持つ属性の集合よりも，より多くの属性を持つと考えられるからである。

（3）and therefore/and as a result など等位接続詞を用いた Cause-effect 文に関しては，Stripping/Gapping の判断は人によって分かれる（(18) および (32c)）。これらの表現は典型的な Resemblance 関係を示す and を用いていることから，Resemblance/Cause-effect の両方の結束関係を表現しうる要素であり，Stripping/Gapping のように現に並行的な要素が配列されている場合に，並行的解釈が強く意識されて容認性が高いものと認める話者は存在している。Because の場合はこれに対して明らかに Stripping などの操作が不可能である。

このような事例から，結局のところ等位接続の場合は Stripping/Gapping が可能で，従属接続の場合は不可能ということではないのか，と考えられるかもしれない。しかしそう考えると，(39) から (42) にある for/so の振る舞いを説明する上で困難を来すし，従属接続詞の場合も though などは，対比を表す but と交代可能な状況で語・句レベルの表現を接続したりできるという事実がある。

（i）Technical literature is full of unpatented though useful information

（ii）There are 77 other local authorities playing the markets in a similar, though less extensive, way

やはり，重要なのは，Resemblance/Cause-effect のどちらの結束関係で接続されているかと

いうことであり，and therefore のようなボーダーライン上の表現もあえて線引きするのであれば，Cause-effect 側の表現であると見なすべきであると考えたい。

（4）and therefore/for/so などを coordination であるとする根拠について補足しておきたい。and, or などの典型的な coordinators が有する特徴としては以下のものが挙げられる。

（i）接続対象の2文を後続させて，接続詞自体が文頭に出ることはできない（接続対象の文の間にしか生じることができない。これに対して従属接続詞は文頭位置が可能である）。

(A) a. *And therefore I joined the party, she extended an invitation.

b. *For I loved her, I got married to her.

c. *So I came back, he called out for me.

（ii）subordinator の前には coordinator が生じることができる。これに対して coordinator の直前に別の coordinator は生じることができない。for/so/and therefore は and/or/but と同様に前には別の coordinator が生じることはない。

(B) a. I married her because she was gentle and because she was rich.

b. *I loved her and therefore I married her or/but and therefore we lived happily ever after.

c. *He asked to be transferred, for he was unhappy, and for he saw no possibility of promotion.

d. *We paid her immediately, so(that) she left contended and so(that) everyone was satisfied. (Quirk *et al.* 1985：923)

（5）なぜ Stripping/Gapping を削除現象と考えないのかについて補足が必要と思われる。もちろんそのように考えることも十分可能ではあるが，しかしそうすると，なぜ subordinators や conjunction の一部（for, so and therefore, and as a result）が助動詞までを削除することができないのかを説明しないといけなくなり，結局 Cause-effect であるかどうかということと関連づける必要が出てくる。それなら，Cause-effect と Resemblance に認められる基本的な振る舞いの違いを直接分布上の違いに結びつけることができれば，その方が簡単な説明ができるのではないかと思われる。命題からの削除であるなら，Cause-effect でも Resemblance でも削除操作自体は可能であるはずだし，for, so, and therefore などの振る舞いを見ていると coordination/subordination という syntactic な違いと直接結びつけてこの問題を考えることも難しいと思われる。

例えば文からの削除とすると困るのは，let alone や as well as のような形式かもしれない。

（i）Robin doesn't speak French, let alone Leslie, German.

（ii）Robin speaks French, as well as Leslie, German.

(Culicover & Jackendoff 2005：278)

(iii) *Robin doesn't speak French, let alone Leslie doesn't speak/speaks German.

(iv) *Louise won't eat shrimps let alone (Sarah) will/won't eat squid.

(Fillmore *et al.* 1988 : 518)

(v) *Joan hates snakes as well as Susan dislikes/hates spiders.

この場合，削除前の文表現自体が認可できないので，これを削除操作の対象として想定することは難しいのではないかと思われる。

また動詞だけではなく，主語名詞句の前置修飾要素だけが削除されるという場合も，文からの削除と考えた場合には，かなり特殊な削除操作を想定しないといけなくなるのではないかと思われる。

(vi) Too many Irish setters are named Kelly and (too many) German shepherds (are named) Fritz.

(vii) Few cats eat Frolic, or (few) dogs (eat) Whiskas. (Culicover& Jackendof 2005 : 279)

仮に，ここでの考え方を援用するとすれば，分割対象になっているものが，NP という句ではなく，N という更に下位のまとまりであるということになるが，Resemblance 接続は文や句レベルだけでなく，単語レベルでも可能である（例えば，[the old [men and women]] などの表現で主要部名詞同士が接続され，ともに前置修飾語の意味的限定を受けるという同じ特性を持つことになる）ので，このような分割があり得ても不思議ではない，ということになるであろう。ここで考える句レベルの統合ドメインのサブタイプとして，語レベルの統合ドメインを想定すると（v），（vi）のようになる。

(v) [Too many [Irish setters and German shepherds]] are named [Kelly and Fritz], respectively.

(vi) [Few [cats and dogs]] eat [Frolic and Whiskas], respectively.

この統合型の表現では，数量詞が両方の名詞を限定する解釈が可能であり，この意味特性を保持したまま，主要部名詞 German shepherds や dogs が分離していると考えればよいことになる。

（6）統合型・分離型の表現というオプションがあると想定した場合に困るのは，発話者が別れる場合である。

A : John ate an orange.

B : And Bill an apple.

これは最初から統合形式が存在し，それを分割したとは考えにくいものであるが，このような場合，話し手 B が Gapping のパターンにあわせて，analogical に表現を使っていると考えてみてはどうであろうか。通常の Gapping の作り方をまねて要素配列をしていると考えるのである。一人が話していて，途中で詰まったりした場合に別の人がフォローするというの

はごく普通に行われることである。聞き手も相手の話を解析しながら，次に登場する表現の可能性を探りながら，会話に参加しているのであり，話者がどう話を続けるべきかをフォローしてやるのは日常茶飯に行われることである。このとき，過去の表現パターンの知識から適切な表現形式を選択してくるのであり，Gapping 形式を選択するのもその一つの表れと考えればよい。

（7）Pseudo-gapping は VP 削除とは異なり，Cause-effect 文脈においても parallel な要素の配置でないと不適切であり，「ずれ」は認められない。

（i）*John ate the orange and Bill *did* (=ate) at midnight.

VP 削除においても，形式的な「すれ」は生じない方がよいのであり（Huddleston & Pullum 2002：1522），複数の対応関係が必要となる Pseudo-gapping においては，なおさら paralellism の要請が強く働くようである。

（8）他の Resemblance relations のサブタイプに関しても，句レベルの結束関係についての制限を設定する必要があると思われるので，以下に提示しておきたい。

（i）Contrast — qi(ai) and ~qi(bi)

（ii）Exemplification — qi(ai) ⊂ qi(bi)

（iii）Generalization — qi(bi) ⊂ qi(ai)

（iv）Exception — qi(ai) and ~qi(bi) ∧ ai∋bi

（v）Elaboration — ai = bi

Contrast/Exception に関しては，句レベルの表現自体に特性があるものとないものの対比が必要となるので，「関係」に対比が存在するタイプの規定内容はここには関係してこない。

（9）集合的解釈（Collective interpretation）というのは複数の entities を統合した集合体が事態に参与する場合の解釈であり，個別的解釈（Distributive interpretation）というのは，複数の entities が別個に事態に参与する場合の解釈である。例えば（78a）で very largely と completely が融合してひとつの様態副詞表現として修飾要素になっているわけではないし，（79）で many players と John, Bill, and Harry が融合してひとつの叙述対象になっているのでもない。（80a）で problems in the classroom と problems in the school が統合されているというのではなく，前者は後者の一部であるという関係である。このとき，2者は個別の概念として捉えられているはずである。

（10）Gapping が Parallel/Contrast 以外の文脈では生じないことについては，Kehler（2002：95）も述べているとおり，Gapping が対比的な文脈に制限されている現象である，ということが関与していると思われる。

（11）（85c）は，統合領域内の要素をポーズをおいて読む場合と，そうではなく single contour として読む場合（つまり純粋に被接続部分だけの接続関係として読む場合）で容認度には差が

認められる。一般に and therefore/as a result の場合は，前後に十分な間をおいてやることによって容認度は改善されやすいようである。そうすることによって，欠損している部分が存在すること，あとで解析し直すことが必要であること，などの処理が可能となるからだと思われる。分離型になると coherence domain 内の要素が single contour で読まれることはなくなるので，統合型の表現の場合よりも容認度は改善されやすい。注4にも述べたが，これらのボーダーライン上の接続表現は，従属接続詞を用いた場合よりも判断に揺れが認められる。しかし and だけを用いた純粋な Resemblance 型の場合よりは，やはり不自然さを感じるところがあるようである。

(12) *John and Billi bought himselfi books on health care. は再帰代名詞自体は束縛条件を満たしていることになり，容認されると予測してしまうが，実際には不可能な形式であるので排除する必要がある。これに関してはいくつかの可能性があると思われる。例えば，

①束縛条件 A に関して，exhaustive binding でなければならず partial binding は認められない，と指定してしまう考え方。

② reflexivity は predicate の特性であり，self を argument としている predicate は co-argument の local binding が必要であるとする Reinhart & Reuland (1993) にしたがって，主語 argument は John ではなく，John and Bill であると考えるやり方。

などあり得るが，いずれにせよ束縛条件 A に関して partial binding を認めないという想定が必要になる。

(13) (110) の場合を Right Node Raising と呼ぶかどうかは問題である。また，(110) の配列のあり方は (61) のルールに合致していないので，左側に conjunct を付加するという形になるのは生産的ではないと思われる。このとき，副詞節は間に挿入できないが，文接続の形式を保てないことが理由の一つかもしれない。つまり先行部分が文になっていないということであり，その後に副詞節を挿入するということ自体が問題なのかもしれない。

(14) 他の研究者の考え方との違いについて若干述べておくと，まず Culicover & Jackendoff (2005) は Stripping を Bear argument ellipsis の一例として，より広い概念の中でとらえている。彼らは indirect licensing によって，直接の文ではなく，先行する文（離れたところにある文）が間接的にこの表現をライセンスすると考えている。Bare arguments は orphan であり，始めから先行文に付加される形で存在するものであると考えられているが，しかし，先行文と後続部分の結束関係による分類は行っていない。これが分布に深く関わることについては着目しておらず，Syntax レベルでは argument があるだけ，という点は同じであるが，それが統合型か分離型か2つの現れ方の一方である，という考え方はとっていない。統合型との関連を想定すれば，orphan と呼ばれる分離要素の意味関係も明確になり，何によって bare argument がライセンスされるかも，より明確に保証できるのではないかと思われる。

Hudson (1976) は postposing と考えて Stripping/Gapping 分析をしているが，彼も結束関係との関連性という視点は持っていない。Stripping と Gapping の類似性については述べられており，両者を共通の原理で説明するべきであるとの議論が展開されている。

Goodall (1987) の考え方との違いとしては，やはり Cause-effect 型の表現との相違を考察していない（単に union of phrase markers は coordination にしか認められない，としているのみである）ことが挙げられる。また，Gapping の配列形式を生じるためだけに linking rule を想定しているが，ここでの分割規則を利用すれば Stripping/Gapping/Conjunction Reduction はすべて統一的に扱える。Goodall は統合形式を生み出すことを基本としてまずルール化し，分離型については特別規則（linking rule）を適用する形で Gapping の生成のみを保証している。

参 考 文 献

荒木一雄（編）(1986)『英語正誤辞典』東京：研究社

Banfield, A. (1981) "Stylistic Deletion in Coordinate Structures." *Linguistic Analysis* 7/1: 1-32.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.

Culicover, P. & R. Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*. Oxford: Oxford University Press.

江川泰一郎 (1991)『英文法解説』改定三版　東京：金子書房

Erteschik-Shir, N. and S. Lappin (1983) "Under Stress: A Functional Explanation of English Sentence Stress". *Journal of Linguistics* 19: 419-453.

Fillmore, C., P. Kay & M. O'Conner (1988) "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*." *Language* 64: 501-538.

Goldberg, A. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach of Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.

Goodall, G. (1987) *Parallel Structures in Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.

Grosu, A. (1985) "Subcategorization and Parallelism." *Theoretical Linguistics* 12: 231-239.

Hankamer, G. (1973) "Unacceptable Ambiguity." *Linguistic Inquiry* 4: 17-68.

Hendriks, P. (2004) "Coherence Relations, Ellipsis and Contrastive Topics." *Journal of Semantics* 21: 133-153.

Huddleston, R. and G. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hudson, R. (1976) "Conjunction Reduction, Gapping, and Right-Node Raising." *Language* 52/3: 535–562.

Kajita, M. (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax." *Studies in English Linguistics* 5: 44-

76.

Kay, P. (1997) *Words and the Grammar of Context.* Stanford: CSLI Publications.

Kehler, A. (1996) "Coherence and the Coordinate Structure Constraint." *BLS* 22: 220-231.

Kehler, A. (2000) "Coherence and the Resolution of Ellipsis." *Linguistics and Philosophy* 23/6: 533-575.

Kehler, A. (2002) *Coherence, Reference and the Theory of Grammar.* Stanford: CSLI Publications.

Kimura, N. (1985) "An interpretive Analysis of Right Node Raising in English." *Tsukuba English Studies* 4: 63-88.

Kuno, S. (1976) "Gapping: A Functional Analysis." *Linguistic Inquiry* 7: 300-318.

Lakoff, G. & S. Peters (1966) "Phrasal Conjunction and Symmetric Predicates." In Reibel, D. & S. Schane (eds.) *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar.* Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall. 113-142.

Levin, N. & E. Prince (1986) "Gapping and Causal Implicature." *Papers in Linguistics* 19/3: 351-364.

Nakajima, H. (1982) "The V4 System and Bounding Category." *Linguistic Analysis* 9/4: 341-378.

岡田禎之（2002）『現代英語の等位構造』大阪：大阪大学出版会

岡田禎之（2004／2005）「文の結束関係と残留要素の相関関係について（1）（2）」『神戸外大論叢』55/3: 47-67, 56/2: 19-35.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Reinhart, T. & E. Reuland (1993) "Reflexivity." *Linguistic Inquiry* 24: 657-720.

Ross, J. (1970) "Gapping and the Order of Constituents." In Bierwisch, M. & K. Heidolph (eds.) *Progress in Linguistics.* The Hague: Mouton & Co. 249-259.

Sag, I., G. Gazdar, T. Wasow & S. Weisler (1985) "Coordination and How to Distinguish Categories." *Natural Language and Linguistic Theory* 3: 117-171.

Schachter, P. "Constraints on Coordination." *Language* 53: 86-103.

Steedman, M. (1990) "Gapping as Constituent Coordination." *Linguistics and Philosophy* 13/2: 207-263.

Ward, G. & A. Kehler (2005) "Syntactic Form and Discourse Accessibility." In Brance, A., T. McEnery & R. Mitkov (eds.) *Anaphora Processing.* Amsterdam: John Benjamins. 365-383.

安井稔（編）（1987）『例解現代英文法事典』東京：大修館書店

Phrasal Coherence and Syntactic Phenomena

Sadayuki OKADA

Kehler (1996, 2000, 2002), adopting the tripartite distinction of David Hume's coherence types (Resemblance, Cause-effect, Contiguity), presented semantic constraints on the identification of those coherence relations that hold between sentences. He demonstrated that the semantic constraints can adequately handle from the perspective of textual coherence some linguistic phenomena thus far considered to be genuinely syntactic in nature. Out of the three categories of coherence relations, the first two (Resemblance, Cause-effect) have been singled out as making a crucial distinction in the explanation of a number of linguistic data. Here in this paper, we would like to revise his definitions of Resemblance so as to expand the range of phenomena to be dealt with. The difference between Resemblance and Cause-effect lies in the fact that the former type of coherence can be maintained not only among propositional components but also among phrasal ones, while the latter holds exclusively between propositional units. This distributional difference, combined with the optional syntactic realizations of phrasal coherence units, will explain a wider variety of data in a simpler manner.